



わかば

2021. 1. 9
(令和3年) 第20-34号

文責 校長 保谷 力

ホームページ <http://www.shokookai.org/gakkou.htm> 毎週火曜日更新

教育目標 「帰国後、日本の教育に円滑に適應できるよう、日本の学校における学習指導要領に沿った国語、算数(数学)の学力の維持、併せて生活・生徒指導を行う。」

重点目標 一人一人の笑顔輝く学校づくり～期待登校・満足下校～



明けまして おめでとうございます

校長 保谷 力

昨年は、4月の緊急事態宣言発令以来、大きな災害に見舞われた大変な1年でした。ポートランド日本人学校では、子供たちの学力維持を念頭に考え、こうした状況の中でもオンラインによる授業の継続を行って参りました。もちろん、本来の学校の姿は、子供同士がふれあい、語り合う中で真の教育活動が行われることは言うまでもありません。しかし、新型ウィルスの世界的な蔓延が止まることを知らず、私達の安全を脅かしている以上、このような授業形態になることは仕方がないと考えております。現在の状況を考えると、今後しばらくの間は、こうした状況が続くのではないかと推測できます。私達はコロナ以前の生活を取り戻すことだけを考えるのではなく、コロナ禍における新しい生活の在り方を模索していく時期が来ているのだと考えます。不要不急の外出が制限されている毎日の中で、仕事の仕方や家族の在り方が大きく変わろうとしています。今こそ、家族を基盤にした生活の在り方を大切にしていきたいと思っております。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

〔3月までの主な行事〕

日付	主な行事	備考
1月 9日(土)	授業始め	
1月16日(土)	入園希望者説明会(13:00～) 入学希望者説明会(14:00～)	オンライン説明会 ※参加者には、事前に事務局よりURLを配信致します。
2月 3日(水)	新1年生入学テスト(9:00～)	オンラインによる
2月12日(金)	幼稚部入園面接(9:00～)	オンラインによる
2月13日(土)	高等部進学者面接予定	オンラインによる
2月20日(土)	高等部進学者面接予定	
3月 6日(土)	幼稚部入園説明会 新1年生入学説明会	オンラインによる
3月13日(土)	卒園式 卒業式	オンラインによる ※在校生は授業
3月20日(土)	令和2年度 修了式	オンラインによる

國學院大學 「全国高校生創作コンテスト入選」 短編小説

ポートランド日本人学校 高等部2年 近藤寧音

近藤寧音さんの描く儂くも不思議な世界をご堪能ください。高校生という多感な時代に、こうした創作活動を通して、現代社会の抱える問題を鋭くそして優しく表現しています。(校長)

「飛ぶか飛ばないか」

高校二年一組、近藤寧音

私は目覚めた日からここで死ぬと決心した。この世界に生まれた人の始まりは皆公平であり、私達は今、限りなく広い平野の中で集まっている。ここはいつも晴れていて、雨が降ることもなく、寒くなることもない。空に浮かんでいるのは異なる大きさの島々で、様々な名前がつけられている。大きな島一つには「高校」という言葉が刻まれて、その上に浮かんでるのは「大学」。またその向こうには「STEM」や「美術」などと多数の島が飛んでいる。それらも無数の職業に枝分かれし、高い高度の島ほどそこでの生活は豪華で、最小限の必需品しか設置されていないこの最下階とはまったく違った。

その島々にたどり着く為には飛ぶ必要があった。成功すれば、その先を上り続ける。だが見逃して失敗してしまうと原点へ逆戻りし、落ちてしまう。私と私の隣にいる子との唯一の違いは、頭の上に浮かぶ、光る数字だろう。

私は見えるはずのない目で自分の番号を見つめた。輝く数字の1は自身をからかっているかのように明るい光を放った。突然、五メートル程離れた所で頭上に351と写った少年が現れた。彼は一瞬もためらわず、近くの島に向かってジャンプしたが、失敗した。光る351が少しちらちらしてから350に変わった。だが彼はすぐに立ち上がって再び飛び、今度は成功した。私は彼が島の側面に捕まり、端を乗り越えて消え去った背中を妬みで見つめることしか出来なかった。

この世界では頭上の数値は、私たちがそれぞれジャンプできる挑戦の数、与えられた機会の数を表している。一生掛かっても使い果てることのないくらい大きな数で生まれる人はいる。彼らは常に恐れることなく、他人よりも真っ先に飛び人々だ。一方、私のような人は一番不運な人間として生まれてきた。誰かがすべての挑戦権を使い果たすと、存在すらなくなるのだ。彼らの行き先は誰にもわからないが、確実に言えることは一つ、もう二度と彼らに会うことはないという事実だ。

私は草の上で横たわり、明るい青空の変化を観察してた。目覚めて上の1が現われた時、すでに与えられた物以上のために努力する心構えは即座に捨てた。この地上での生活は、間違い

なく自慢できることではない。しかし私にとって一度の失敗は死に値するもので、より良い生活を得るために唯一のチャンスを危険にさらすことは理不尽なことだった。私たちは公平になんか生まれてきてない。数字が何を意味するのか教えられた時からそれは確かだった。

私は涼しくも暖かくもない、穏やかなそよ風に目を閉じた。横では何人かの少年少女が通り過ぎ、息の下でうわさ話をしていた。人が私の後ろで無駄話をするのは珍しいことではなかった。死にかけている少女に一体何が起こったのかと不思議に思い、同情するのは無理もない。きっと私は前世で何らかの罪を犯し、その償いで今は罰を食らっているのだと言い張る者も時々出てくる。だが異常に彼らの言葉は私になど向けられていなかった。

「ねえ、あの男見た？」

「見た見た。まだあんなにチャンスがあるのに、なんでジャンプしないんだ？」

「彼のような人がここで留まることを選ぶのは見たことがないよ。」

私は目の角からその方向をちらりと見た。彼らは木陰で座っている誰かを見つめてた。私は芝生から起き上がり、三人組に向かった。近づくと彼らは顔を上げ、私の睨んでる目で少しビククリしたようだ。

「陰口はよくないよ。」

という一言を言って彼らは素早い謝罪をつぶやきながら去っていった。しばらく睨み続けた後、顔の筋肉を休ませた。

木の下の子は私と近い年齢に見えた。彼はそこで体育座りをされていて、体を震えさせそうなほどの空虚感で覆われていた。彼の数値を見たとき、私の心臓は止まりそうになった。以前の子供たちがなぜ彼についてささやいているのかがよくわかった。きれいに整った顔と体つき、高価そうな衣服、そして頭の上の5000という数字。彼はすべてを生まれもったと主張する完璧な外観をしていた。私は自分自身を見下ろし、ため息をつきながら顔をしかめた。

私が彼の隣に座ったとき、彼は見向きもしなかった。長い間言葉を発さなかったので目の前で遊んでる小さな子供たちを見ながら自分の好奇心をそらしていると、長年の沈黙に感じた間をやっと破ったのは彼の声だった。

「なぜ彼らの会話を止めたのですか？」

彼の言葉がいきなり来たので、落ち着きを取り戻すのに少し戸惑った。

「私たちが何らかの異常のように話されるのは気分が悪いもの。」

彼は初めて私のことを見た。そして彼の目が私の数字に気づいた瞬間は分かりやすかった。他人よりもはるかによくショックを隠し通したが、間違いなくそこにあった。私は膝を胸に折り込み、彼の視線を避けようとした。続く強い気配に押し潰されそうで、ボールに丸まってそのまま消えたいと願った。

「あなたの事情は？」

話を早く逸らすために尋ねてみた。

「正直言えば、なぜ僕だけこんなに数字が大きいのかは分かりません。」

話している間、彼の指がぼんやりと芝生を引き裂いていた。

「あなたは僕が飛ばないことを不思議に思い、僕を憎んでるでしょう。」

「どうして私があなただを憎むの？」

「あなたが決して望めないことをする機会があるのに、僕はここでだらけているだけだからですよ。きっとこの機会は全て僕ではなく、あなたのものであったはずに違いありません。あなただったら成し遂げたい事が沢山あり、この機会を有効に活用するでしょう。だから僕は出来損ないでしかありません。」

私は首を振った。

「夢なんてもうとっくの昔に諦めてるよ。私はこのように生きることをもう決心したんだ。一生懸命働いて飛ぶことは試行錯誤を意味し、私はどんなエラーも許されない。だから一生懸命働かないことにした。」

彼はまた長い間喋らず、私は何か間違ったことを言ったのか心配し始めていた。

「君はどうして飛んでみないの？」

と問いかけ、彼は自分の手を見下ろして考えてる様子だった。

「飛ぶ理由が何もないんです。やりたいことや欲しいものもありません。登る動機がまったくないのです。」

男はそう語り、私は彼の言葉を頭の中で何度か繰り返した。

「それは良いことじゃないの？」

「はい？」

「理由が何もない。それは良いことなんじゃない？」

彼は混乱したように私を見つめてた。そして私は微笑みながらこう伝えてみた。

「理由はなくても、チャンスはたくさんあるんだからとにかくジャンプしてみたら。やっぱりこの島は嫌だと思った時は、別のどこかへ向かってジャンプしてみることができる。落下してしまった時のためにあなたを救ってくれるクッションもある。だったらその本当の理由を見つけ出すために、色々やってみるほうがこの辺りを永遠に歩き回るより良いでしょう。」

彼は大きく開いた目で、驚いた表情だった。

「理由を見つけるためになんでも試さなきゃいけないんじゃない？そして君がやっと理由を見つけられた時には、既に多くの経験や知識を持ってるでしょう。そうすると目標を追求するのがより簡単になるだけでなく、他の分野の技術なども取り入れて、よりすごい人になれるでしょう。だから理由がないのは逆に良いことではないの？」

頭を傾けてもう一度彼に尋ねてみた。彼はそのまま瞬きもせず、じっと見つめ続けた後、突然笑い出した。彼が笑いの力で体が曲がった間、私は頭を抱えていた。なにか面白いこと言っただけ？

彼はようやく体勢を立て直し、目の隅にたまった涙を拭き取りながら新たな決意で私を見上げた。

「そんなことを僕にわざわざ教えてくれてありがとうございました。今までそのように考えたことはありませんでしたが、あなたはきっと正しいです。僕はもうこのまま迷い続ける訳にはいきません。」

「それは良かったけど、たまには戻ってきて私を訪ねてよ。」
彼は私の小指と指切りをし、にっこりと笑った。

彼に初めて会った日から七年も経った今、私は未だに空で浮かぶ島ではなく、地上の平野で暮らしている。だがあの頃とは違って、今ではここも立派で、誰でも快適に住めるコミュニティに成長していた。あの5000もチャンスがあった男はその後、私みたいな運がついてなかった人のために頑張って色々な島に向かった。そしてそこから道具や材料を沢山ここに持ち帰り、私達は島に行かなくても贈り物を使って一生懸命働き、豊かな生活を送れるようになったのだ。実は他にも彼のように残ったジャンプが多く、何をしようか迷っていた人が数人いたらしく、彼らも私達のために島々から支えてくれている。

この世界に生まれた人の始まりは皆公平ではない。正直に言えば私はいまだにこの光る1や、こんな狂った世界を作り上げた物が嫌いだ。だが人々が他人を助け合うことで、チャンスを1つしか与えられなかった私でも、皆公平に幸せな人生を送ることができるようになるのだろう。そしていつか、自分の数値など気にせず、また他人をその数字で彼らの価値や人格を判断することのない世界になってほしいと私は願っている。